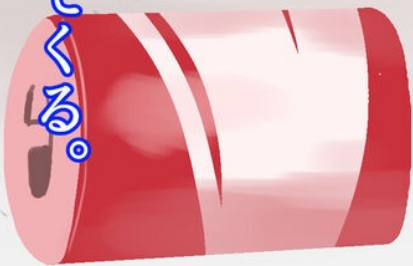





俺は北浜 耕田
とある魔法使いから小さくなる魔法を
もらった。
小さくなっている間に死亡すると
生き返ることもできる。
今日はその魔法を使ってすごい体験を
しようと思う

「小さくなれ！」俺はそう念じた。
すると俺は身長2cmになった
すごい、周りが大きくなった。
目の前の空き缶がものすごく巨大に
見える。


ズシン、ズシン
遠くから地響きが伝わった
足音だ。誰かがこちらに近づいてくる。
俺は物陰に隠れた。
その足音の主は……





女子小学生だった。
5年生くらいか。
「あの子、かわいいな。」
俺は左の子に注目した。右の子より
少し大人しそうで、好みだった。

「あの子にするか……。」「
俺は決めた。
あの子に踏みつぶされる
ことを。」



俺は走り、夏奈子と呼ばれた
女の子の足元まで行った。

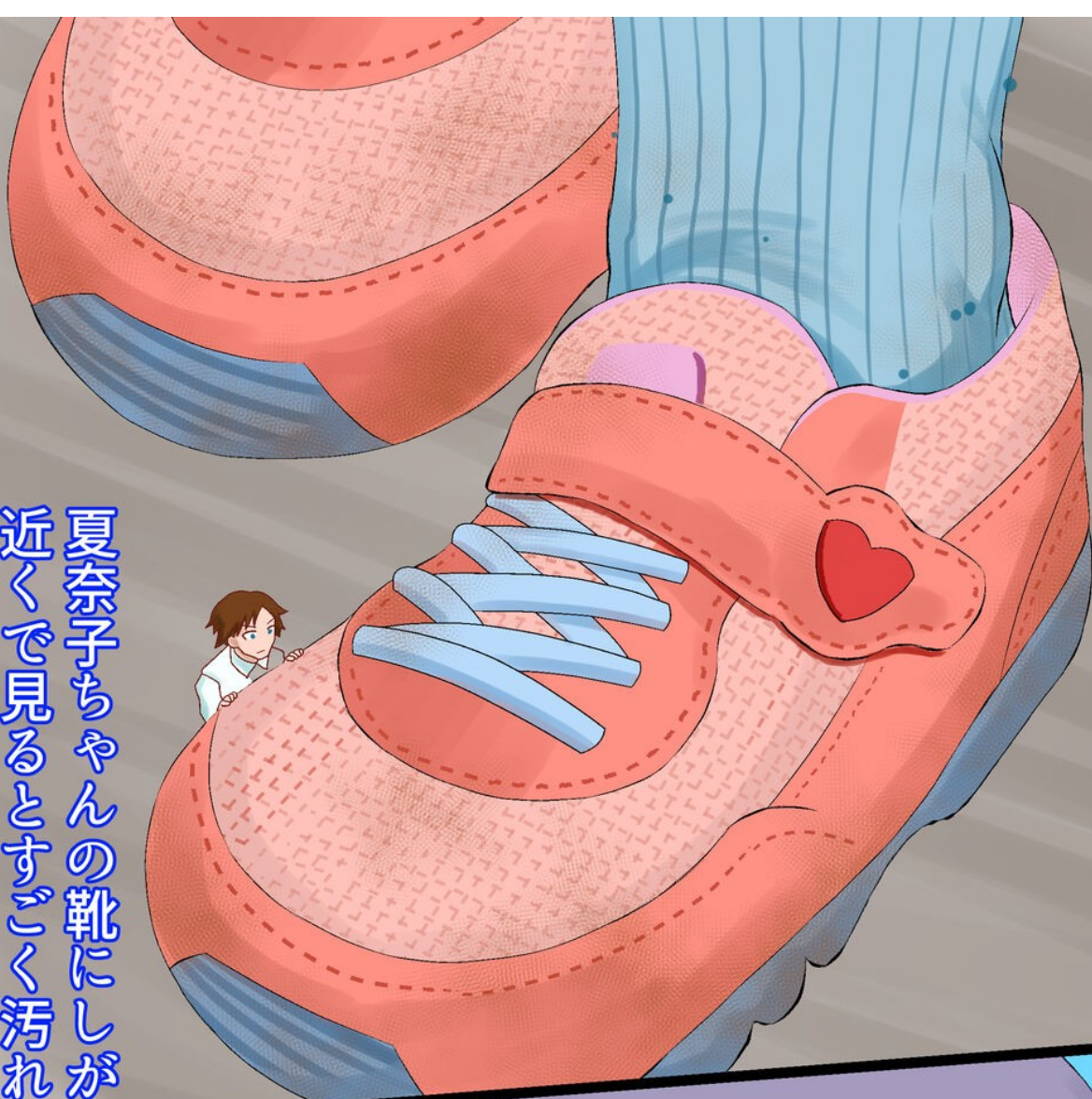
「夏奈子ちゃん、じゃあね！」
右の子がそう言った。左の子の
名前は夏奈子というらしい。

すごい迫力だ。しかし、感動の声を
あげられない。彼女に気づかれては
いけないのだ。俺は静かに慎重に
彼女の足元に行く。

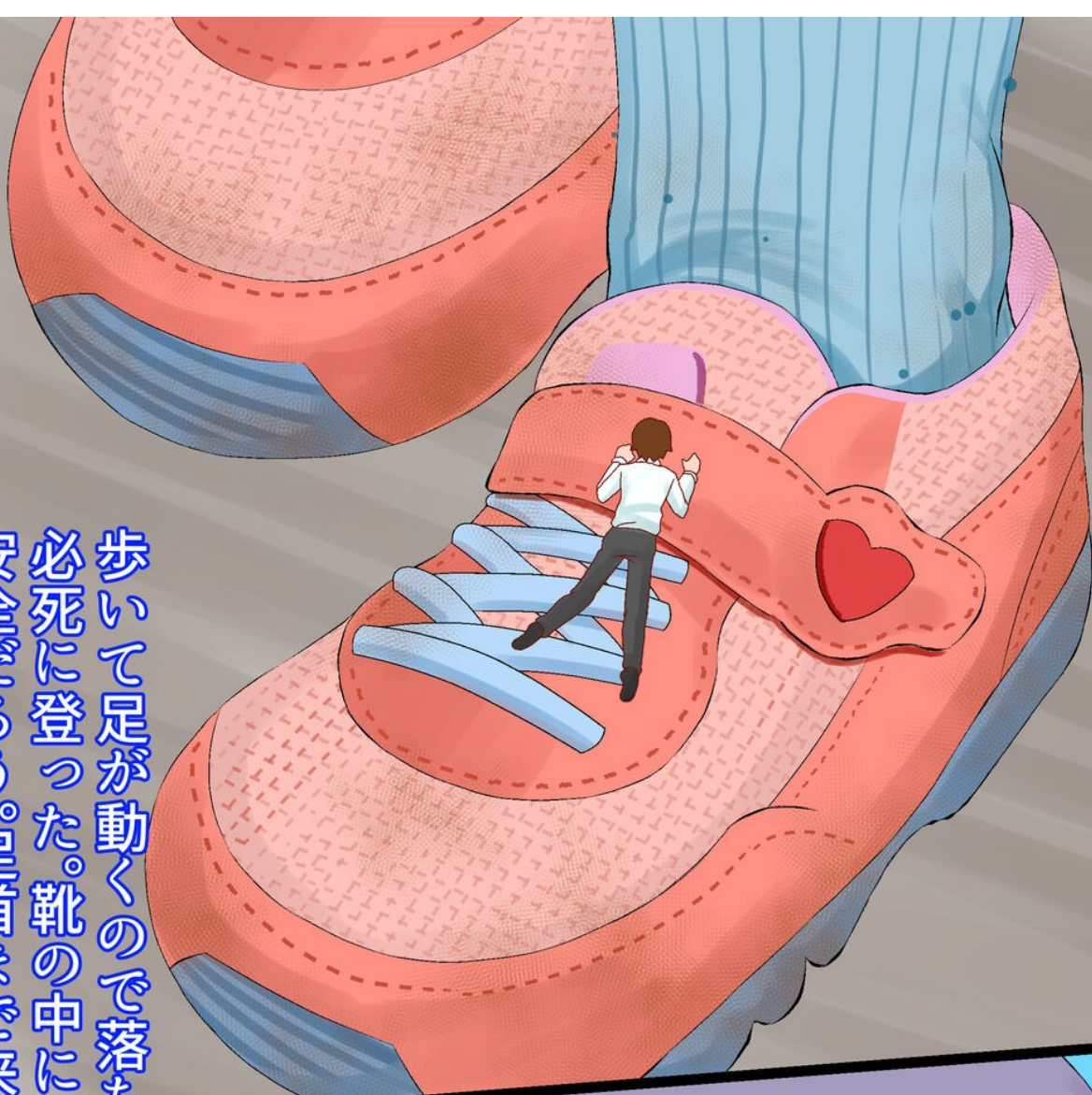
(よし、バレてないな)
俺は血を吸う蚊のように
そっと彼女の足に乗った。
本当に虫になった気分だ。



夏奈子ちゃんの靴にしがみついた。
近くで見るとすごく汚れている。
きつと外遊びをしてきたのだろう。
俺は踏まれないよう気を付けながら
靴を登った。



歩いて足が動くので落ちないように
必死に登った。靴の中に収まれば
安全だろう。足首まで来ると彼女の
足の匂いがほのかに感じられた。
でもまだ匂いを楽しむ余裕はない。
早く靴の中に入ろう。

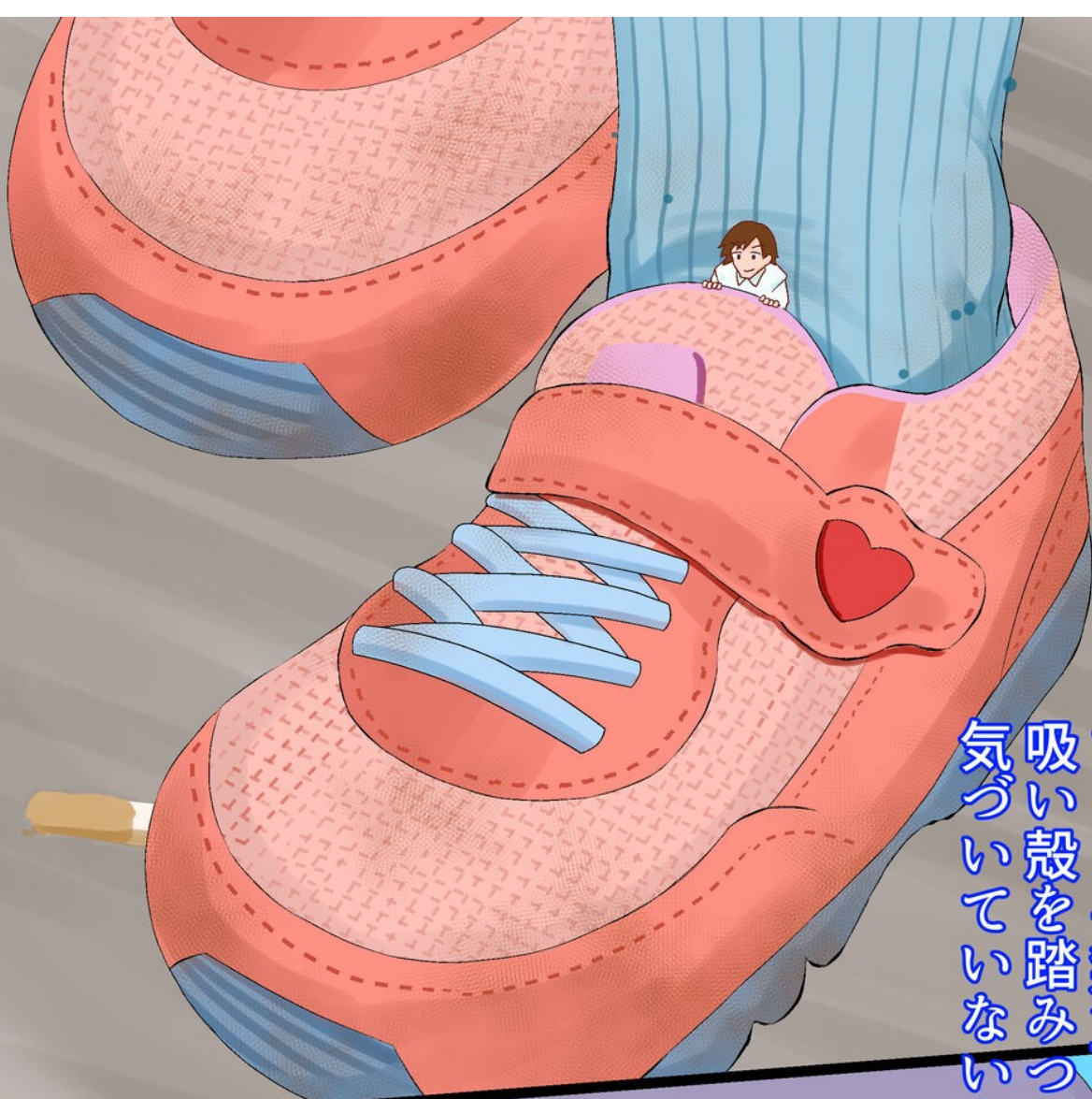




(やった！成功だ。)
俺は無事に靴の中に
収まった。

夏奈子ちゃんは陽気に鼻歌を
歌いながら歩いている。どうやら
バレていないようだ。
足首から彼女の体温と足の匂いを
感じる。暖かくて、少しくさい……。





すると、夏奈子ちゃんはタバコの
吸い殻を踏みつぶした。踏んだことに
気づいていないようだ。

一瞬で吸い殻はぐしゃぐしゃにな
なった。たった一踏みで……
(俺も数時間後……あなるのか)
俺は少し怖くなった。と同時に
激しく勃起した。夏奈子ちゃんに
踏みつぶされる未来を想像して
勃起した。



家に着き、玄関で靴を脱いで
一息つく夏奈子ちゃん。
俺は靴下の中に入ってやり過ぎした。
足の裏は、汚れていた。
俺はさらに勃起した。靴下に
付いた汚れが羨ましく感じた。
それにしてもかわいらしい
靴下を履いている……。



部屋に付いた。俺は急いで靴下から飛び出し
脚を降りて駆け出した。
ゆっくりしては踏みつぶされるかも
しれないからだ。そして



後ろでもものすごい音と地響きがした。夏奈子ちゃんはただ歩いているだけだ。歩いているだけ。それだけでものすごい足音がした。

ド
ン
ン
ン

実際は足音なんてほとんどしていない。でも身長2cmの俺にはものすごい衝撃に感じられた。



「ふう、疲れたあ」

彼女はランドセルを降ろした。
俺はしばらく夏奈子ちゃんを
眺めた。

すごい……ものすごい大きさだ。
彼女の身長はおよそ140cm
俺には70mに相当する大きさだ。



彼女の顔が遠くに感じる。
かわいい。そしてピンクのパンツ。
俺はしばらく彼女の顔とパンツを
眺めていた。そして俺は足フエチで
靴下フエチ。

夏奈子ちゃんの脚も眺めた。
かわいい靴下だ。よく似合ってる。
靴下の繊維までよく見える……。
俺は絶景を堪能した。



夏奈子ちゃんは一度部屋から出た。
俺はそのすきに全裸になった。
踏みつぶされるときは全裸がよかった
からだ。



そして、彼女が戻ってきた。
(いよいよ、か)俺は今から……
この女の子に、踏みつぶされる。
踏みつぶされて、死ぬんだ。



ぐんぐんと近づいてくる夏奈子ちゃん。
ズシン、ズシンという足音が響く。
すごい迫力だ。

俺はドキドキしていた。
これから一度死ぬという恐怖。
そして興奮に。そう、俺は夏奈子ちゃんに
踏みつぶされるのだ！



そして、俺の視界は夏奈子ちゃんのかわいい靴下に包まれた足の裏で覆われた。ものすごく大きい。女子小学生の足の裏がここまで大きく感じられるなんて。夏奈子ちゃんは当然俺に気づいてない。彼女は俺を踏みつぶすことに気づくことさえしないのだ。



足裏から部屋のほこりが落ちてきた。
砂埃に汚れた足の裏。俺は今からこの
汚れの仲間入りをするのか……。
そして、そう思うと。これから
踏み殺されるんだ、と思うと……





ドオオオオ



気づくと俺は逃げ出していた。

後ろから遠ざかる足音が響く。やっぱり怖い。生き返れるとはいえ死ぬのは怖かった。

そして彼女は宿題を始めた。
机に向かって静かに何かの問題を
問いている。

俺は彼女の足元に行くと
椅子に座っている夏奈子ちゃんを
見上げた。



今ならじっくりと彼女の姿を見れる。
俺は夏奈子ちゃん顔、脚、足の裏を眺めた。
かわいい子だ。たまたまこんな子が通り
かかるなんてなんて幸運だ。

そしてこの汚れた足の裏、靴下。
すごく汚い。毛玉もたくさんついていて
おそろく3年は履いているだろう...
汚れが指の形についている。



俺は思わずひざまずいた。そして
彼女に感謝した。勝手に部屋に侵入して
じろじろと足の裏を見ていることを
心の中で謝った。

足の裏からはなかなかの匂いが
ただよってきた。俺はそれを嗅いで
激しく勃起した。女子小学生の足の匂いを
かいで勃起した。



「夏奈子さまーありがとうございますー」
俺はそんなことを言った。みじめな気分と
興奮が湧いてきた。

小学5年生の女の子の前で
跪いて様付けで名前を呼ぶなんて。
しかし俺はしばらく「夏奈子さまー！」と
呼びかけた。夏奈子ちゃんが本当に俺の
女王様に思えてきたからだ。



夏奈子ちゃんは一生懸命に問題を問いている。頬に手を当てて
悩んでいるようだ。
すごくかわいい。
「頑張ってください。夏奈子の妹」
俺はそう応援した。



俺は彼女の足に抱きついた。
勃起したペニスをこすりつけた。
すごく汚い足の裏にペニスを当てると
興奮して、さらにペニスが固くなった。
「夏奈子さま……」そう言いながら夏奈子ちゃんの
足の匂いをかぎ、足の裏を舐め、靴下を噛んだ。



「あ、ちひろちゃん？」

夏奈子ちゃんは電話を始めた。
そしてふと足を動かした。そのせいで
俺は足の下敷きになった。

「うああっ！俺は夏奈子ちゃんに
踏まれた。」

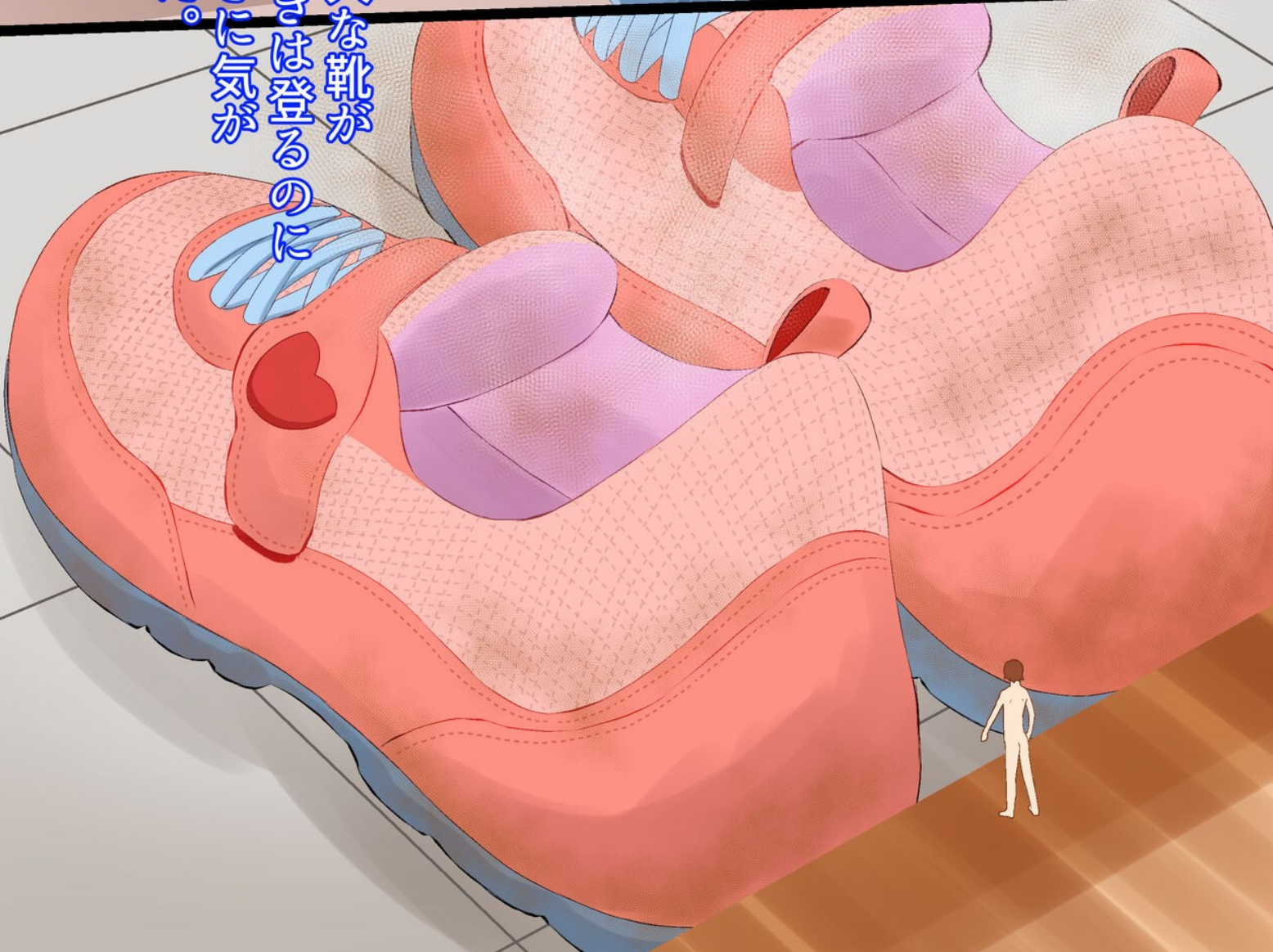


ものすごい重みだった。
このまま、つぶれるのか……。
夏奈子ちゃんは電話に夢中で俺のこと
なんか気づいていない。俺はみじめだった。
そしてさらさらさらさら勃起した。

「夏奈子……さま」
つぶれそうになった
瞬間、夏奈子ちゃんは
立ち上がり玄関の方へ。
俺は急いで足にしがみついた。
痛みは我慢した。

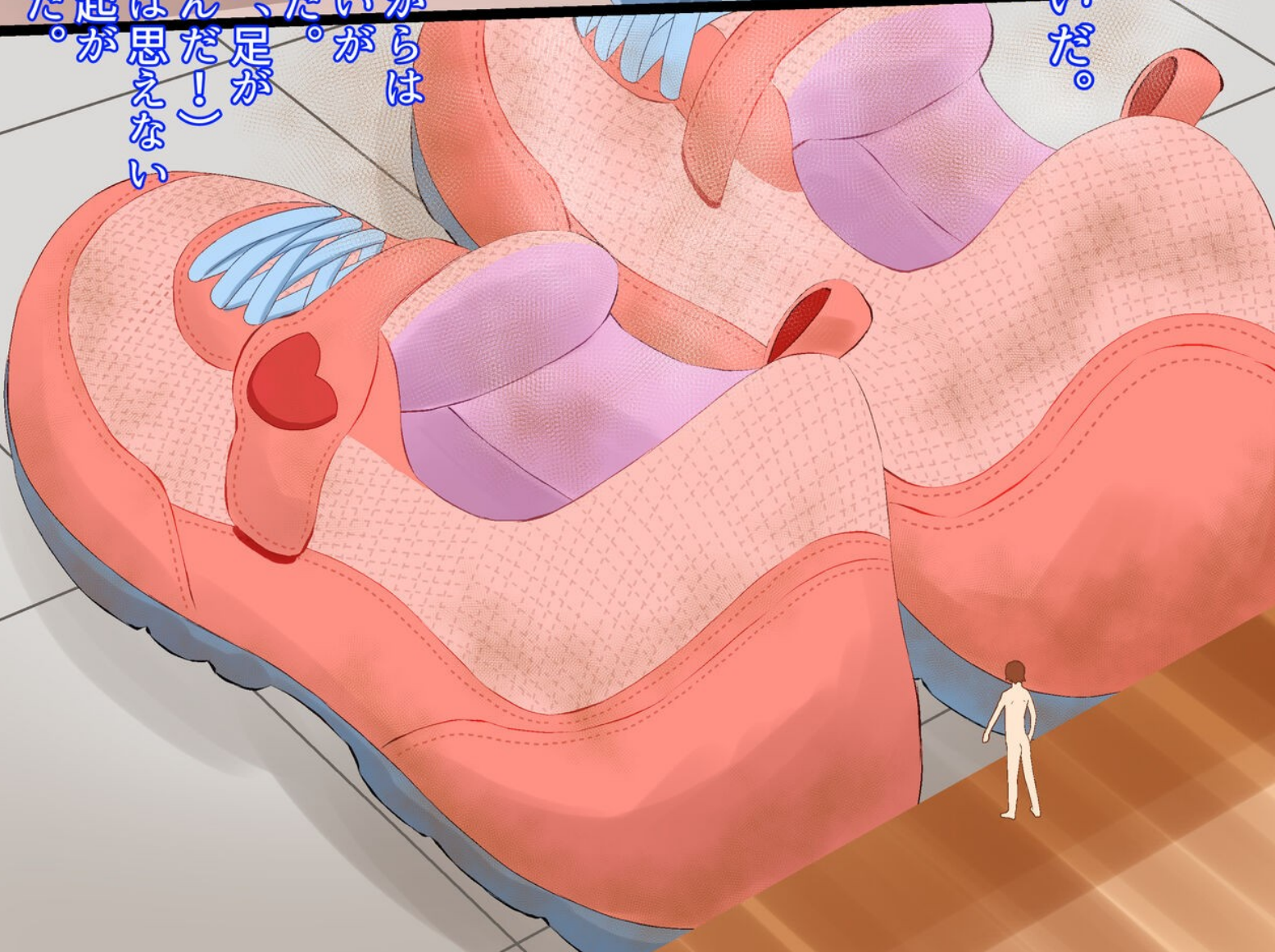
夏奈子ちゃんが玄関につく前に
俺は全力で走り、さつき脱いだ靴の
前に立った。いよいよ目的を果たす
時が来たのだ!

そこには巨大な靴が
あった。さつきは登るのに
必死で大きさに気が
回らなかった。



(すごく、大きい……。これが、女の子の靴なのか)サイズはおよそ18cm。俺にはおおよそ長さが9メートルくらいだ。よく見ると靴は靴下よりずっと汚い。砂埃で激しく汚れている。

そして履き口からはものすごい匂いがただよっていた。(夏奈子ちゃん、足がすごくくさいんだ!)女子小学生とは思えない匂いに俺は勃起が止まらなかった。







俺は夏奈子ちゃんの臭くて汚い靴の中に飛び込んだ。すごい空間だった。中も汚れている。そして、靴の中の観察が終わらないうち

夏奈子ちゃんの巨大な足が迫ってきた。





俺は人生で最大の勃起をしていた。
すごい迫力：靴下の繊維、縫い目が
しっかり見える。汚れも……
俺は今から夏奈子ちゃんに……



ここは靴の中だ。
もう逃げ場はない
俺は……もう
夏奈子ちゃんに
踏みつぶされる運命
なんだ！



足が靴の中に入る直前、
靴のサイズがかかっている
タグに彼女の名前が書かれている
ことに気づいた。

高崎 夏奈子

それが彼女の名前
だった。



夏奈子ちゃんは足を靴の中に入れた。

俺は走った。
つま先の方へ

「夏奈子ちゃん！
高崎 夏奈子ちゃん！」

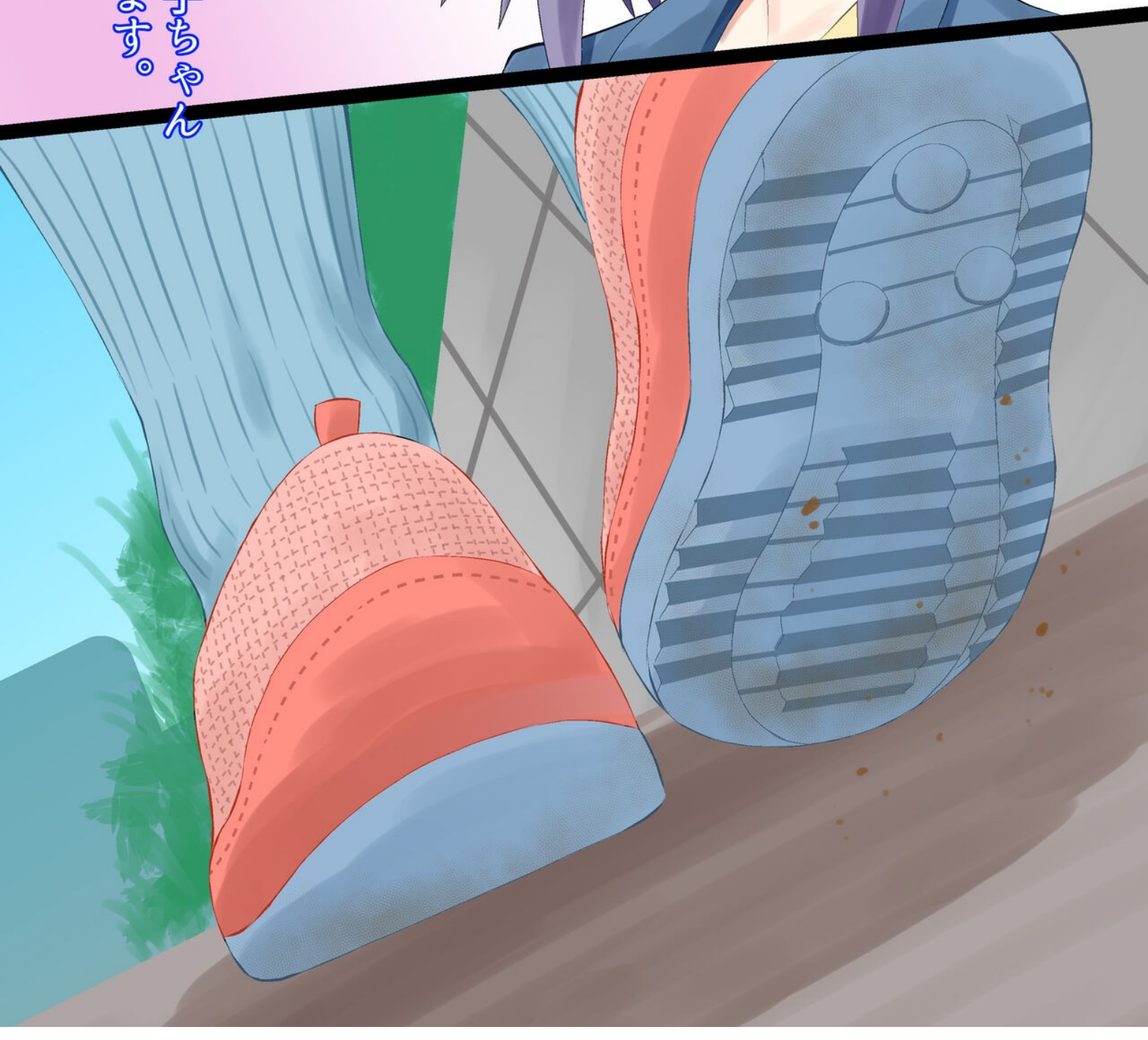
俺は何故か夏奈子ちゃんの名前を叫んでいた。これから俺を踏みつぶす女の子の名前を。



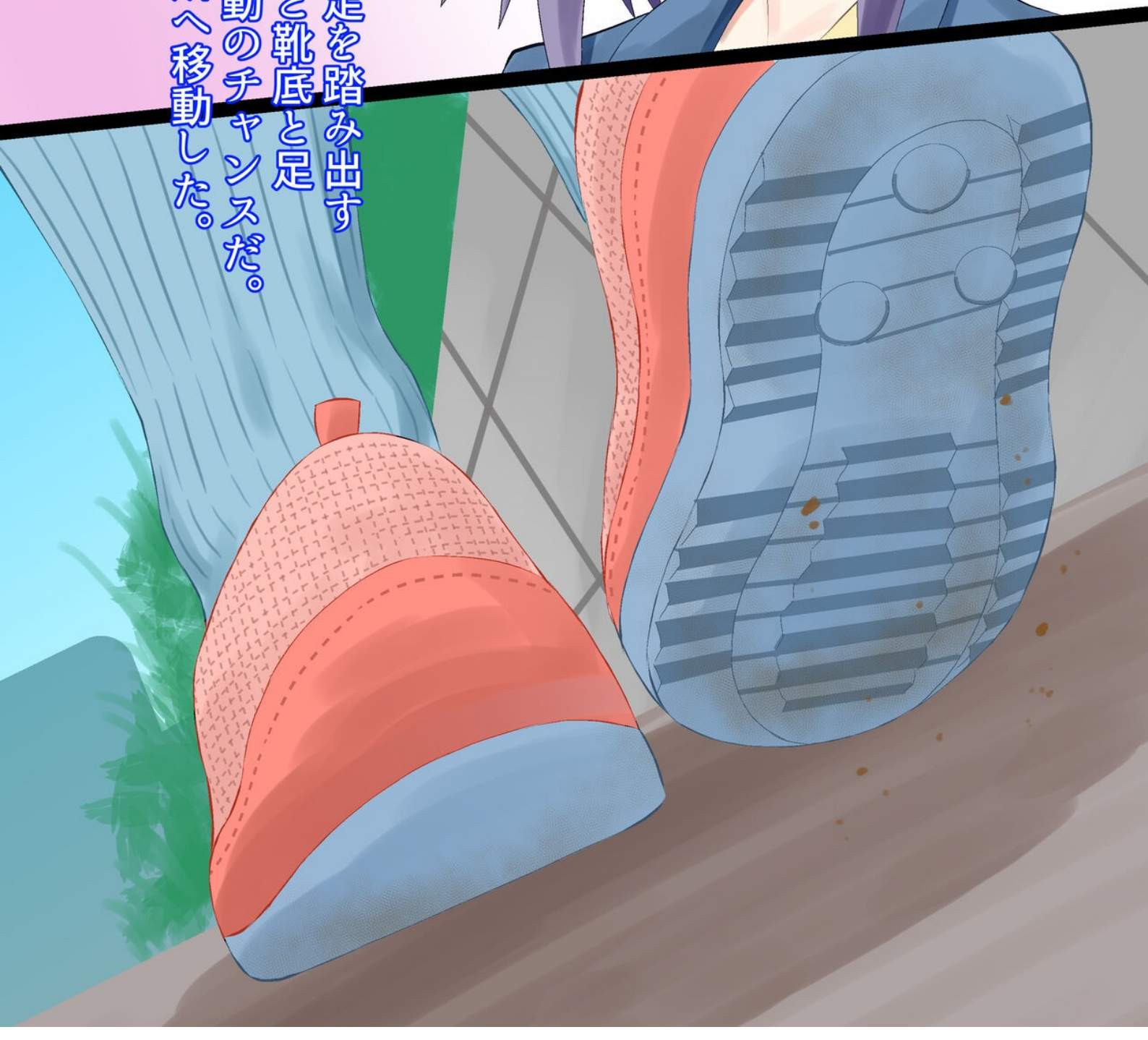
夏奈子ちゃんが靴を履いた。
俺は指の間に入って踏みつぶされるのを
免れていた。

まだ時間じゃない
この後、彼女が歩き
だしてからだ。

夏奈子ちゃんはまた鼻歌を
歌いながら歩きだした。
俺は彼女のかわいい顔を
思い浮かべた。ごめん夏奈子ちゃん
そして、ありがとうごさいます。




そして時は来た。彼女は右足を踏み出す
ために右足を上げた。すると靴底と足
の間に隙間が生まれた。移動のチャンスだ。
俺は一番体重がかかる場所へ移動した。





ついに踏みつぶされる時が
来た。もう逃げられない。

夏奈子ちゃんにとっては
ただの歩行のための一歩だ。
しかし、俺にとっては……



「高崎夏奈子ちゃん！
ありがとうございます！
俺は君に踏まれて幸せ
です！」

俺は夏奈子ちゃんの
靴の中で絶叫した。
蒸し暑く、ものすごくくさい
そんな靴の中で俺は最後の
絶叫をあげた。当然夏奈子ちゃんには
届かない。



俺はこれから見ず知らずの
女子小学生に踏みつぶされる。
汚い靴の中でみじめに、誰にも
知られず、夏奈子ちゃんにさえ
気づかれず。靴の中で死ぬ。



そして。

ズ
ッ
ッ
ッ



俺はつぶれた

アジター!!



「夏奈子さ……」
俺は最後に夏奈子ちゃんの
名前を叫ぼうとした。

するともものすごい圧力で
俺はぐちゃぐちゃに踏み
つぶされた。

俺はつぶされ、汚い靴下に
べったりとこびりついた。
これで俺も夏奈子ちゃんの
靴下の汚れの仲間入りだ。



俺はつぶされたが意識があった
自分の身体がぐちゃぐちゃになり
靴下にしみこんでいくのが
わかった。

当然動けないが俺は
心底嬉しかった。
俺は夏奈子ちゃんに
踏みつぶされたのだ。

女子小学生に踏みつぶされて
死ねるなんてとても
信じられなかった。

そして夏奈子ちゃんにはしばらく
お出かけしていた。俺は何度も
何度も踏まれ、つぶされていた。




遠くで夏奈子ちゃんの談笑が聞こえた。楽しそうな声。夏奈子ちゃん、俺は今君の靴の中でつぶされているよ。

夏奈子ちゃんが楽しそうによかった。俺は薄い意識の中で彼女の楽しそうな声を聞いていた。



夏奈子ちゃんに
何度も踏まれ、
体温と汗で
俺はどんどん
ふやけていった。

靴の中はそうとう暑い。
汗で湿度も高い。そして
くさかった……。



もはやどこまでが
靴下の生地で
俺の身体なのか
わからなくなるほど
俺は夏奈子ちゃんの
靴下にこびりついた。

夏奈子ちゃんの汗と汚れ
がしみこんで俺は靴下の
シミになりつつあった。
意識も遠のいてきた。
このまま生き返らなければ
どうなるんだ？

もうこのままでもいい気がしてきました。このまま、夏奈子ちゃんの靴下のシムシムとして生きていこう。

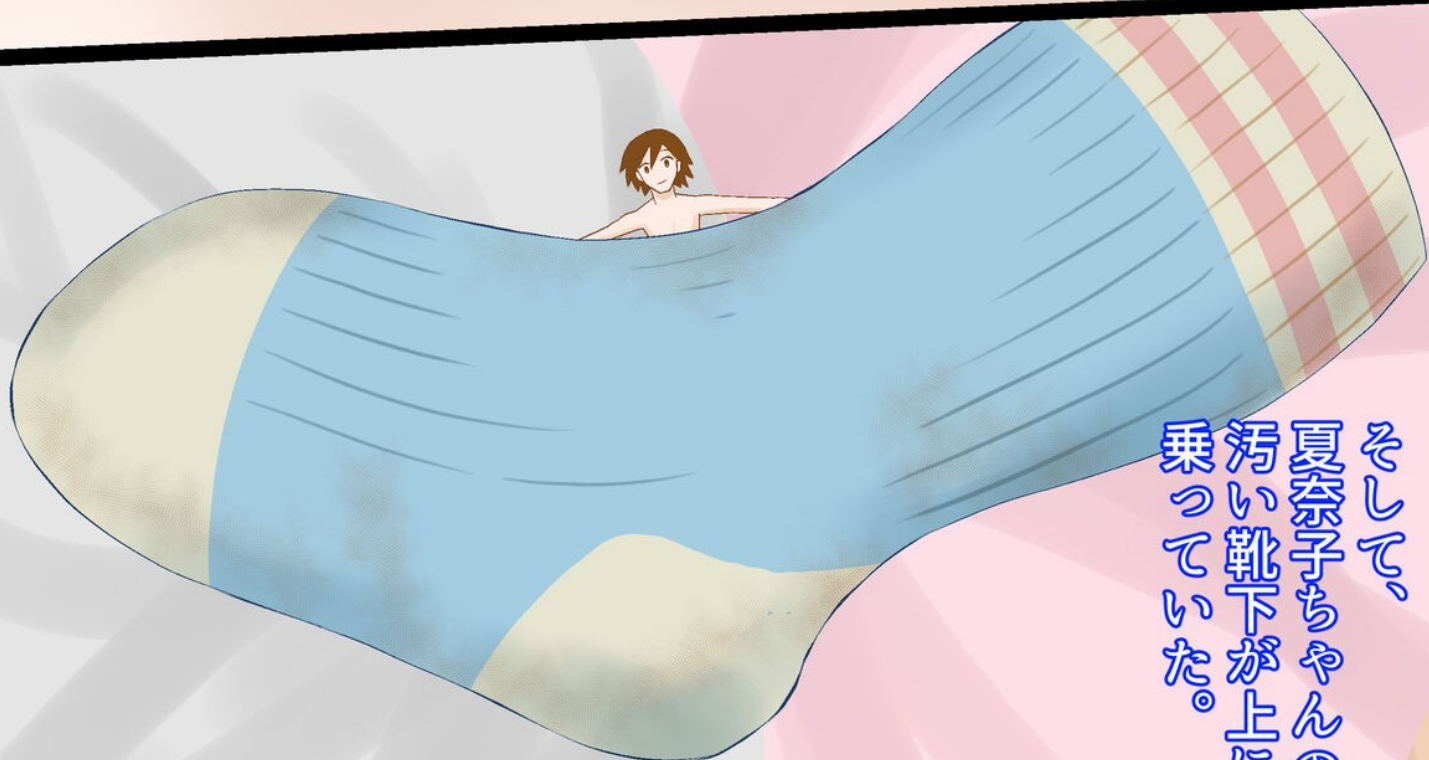
夏奈子ちゃんに何度も踏まれて一生彼女の足の裏で暮らそう……夏奈子ちゃんは、俺の……女王さまなんだから……。

…気が付くと俺は
生き返っていた。魔法を
使ったのだ。無意識に。

夏奈子ちゃんは帰宅
していた。靴下を脱ぎ、
洗濯カゴに入れた。
俺は洗濯カゴの中で
目を覚ました。他の
洗濯ものの上に
寝転がっていた。



そして、
夏奈子ちゃんの
汚い靴下が上に
乗っていた。



夏奈子ちゃんは部屋に
戻ったらしい。静かな中
ひとり洗濯カゴの中で



俺は夏奈子ちゃんのか
くさい靴下の下敷きになり
しばらく呆けていた。
靴下の重みと匂いを感じながら。
そしてさっきの出来事を振り返った。
俺は夏奈子ちゃんに踏みつぶされ
たのだ。すごく、気持ちが悪かった。

俺は夏奈子ちゃんのか
靴下でオナニーした。
靴下にさらにシミが
ついた。我慢でき
なかつたのだ。

そしてこっそり部屋に戻り
服を回収して夏奈子ちゃんの家を
後にした。俺はこのことを
一生忘れないだろう。







